し、さらに上昇させている要因を明らかにするための基礎資料とすることを目的とした。

2．研究方法

1）用語の定義

多産婦：看護大辞典[8]によると、2回以上の分娩をした女性となっているが、多良間島の合計特殊出生率の3.14を考慮し、ここでは3回以上の分娩をした女性と定義する。

2）調査方法

沖縄県宮古地域の保健師3名に半構成的な面接調査を実施した。面接内容は(1)宮古地域、多良間島の地域特性、(2)少子化対策につながるような保健活動について、(3)多良間村の人がなぜ多産であるのか（島の人間関係、出産・子育て環境や価値観、など）であった。

3）調査期間とデータ収集方法

平成17年3月10日に実施し、面接時間は1時間とした。面接内容をその場で保健師の言葉に限りなく忠実に記録した。三名の保健師は、職務経験30年以上、子どもの数は、4名、4名、2名であった。沖縄生まれであり宮古地域で生活している。

4）分析方法

得られたデータを類似した意味・内容のデータ同士でまとめ、コード化し、抽象度を上げてカテゴリーを抽出した。

5）倫理的配慮

対象者には研究の主旨と具体的な面接方法および内容を書面を用いて説明し、承諾を得た。また、研究で得られる個人情報は研究目的以外には使用せず、対象者のプライバシーは最大限に尊重、保護することを口頭で説明した。

3．研究結果

1）地域特性

宮古群島は、隆起サンゴ礁からなる平坦な大小8つの有人島からなっており、年平均気温23.3℃で年間を通して温暖な亜熱帯海洋性気候である[9]。宮古福祉保健所は、1市、3町、2村（上野村、多良間村）を管轄し、管内人口は54,915人、世帯数は20,961世帯（平成16年）である。宮古地域の高齢化率は21.1%、合計特殊出生率は2.14と全国平均の1.32（平成14年）を大きく上回っている。

宮古群島の一つである多良間村は宮古島と石垣島のほぼ中間に位置し、周囲約26.2ｋｍ

の楕円形をした多良間島と周囲 6.5ｋｍの水納島の２つの島からなっている。島への交通手段は空路（宮古空港から１日２往復、石垣空港から１日１往復、所要時間ともに約 25 分）と海路（宮古島から１日１往復、所要時間 150 分）がある。多良間村の生活圏域は徒歩で 10 分程度であり、島内の交通は自家用車のみでタクシーはなく、レンタカーによる移動は可能であるが、筆者が訪問した際は初対面の関係でも、車を貸してくれた。家や、車には長期の不在以外、基本的に鍵はかけない。

村の主な産業は農業でサトウキビ栽培、畜産、タバコ栽培が中心であり、約 45％の人が従事している[10]。人口は 1,381 人、世帯数は 573 世帯（平成 15 年度）である。島には出産施設がないため、宮古島もしくは沖縄本島の病院で出産する。村に保育所は、１施設のみで 47 人が入所している[11]。多良間村の路地では子どもたちが集団で遊んでおり、都市部ではあまり見られなくなった光景が見られた。児童人口割合は 23.7％、高齢化率は 23.9％[12]で、若い世代も多いが高齢の世代も多い村といえる。離婚率は平成 14 年に 1.48、平成 15 年に 0.73 となっており、沖縄県の 2.84、2.77 より低い。

教育面では、多良間島は“高校がない島”であり、進学する場合は宮古島か、沖縄本島に下宿しなければならない。平成７年～10 年の高校進学率は 100％である[13]。

数多くある文化財の中でも特筆されるのが、旧暦の８月に催される“多良間島の豊年祭（八月踊り）”（国の重要無形文化財）であり、伝統文化の伝承にも力を入れている。南島の自然と歴史・文化と島人の心情（しまんちゅのこころ）が、今もなお息づく村である[14]。多良間島は豊かな自然と温かい人情や生き生きとした活気のあふれる、島全体がひとつの家族である島と言える。

２）少子化対策

この地域では出生率が高いため、少子化に対する切迫した危機感および出生率を上昇させようという意識は語られなかった。また、高い出生率の為、少子化対策を前面に打ち出した事業はみあたらなかったが、子育て支援に関連する事業が実施されていた。

多良間村の子育て関連事業

	子育て関連事業	内　　容
子どもの成長を支える母性の健康の確保と増進	産婦人科巡回診療	多良間島には診療所はあるが出産施設がないため、巡回診療が始まる以前には「飛び込み出産」（健診を受けずに初回が出産というケース）が多かった。妊産婦が定期健診を受ける際の、毎回島外に通う精神的、身体的、経済的負担の軽減を図るために、県立宮古病院から派遣される医師、助産師等によって村診療所で年に 6 回実施されている。妊産婦が島内で健康状態を把握する上で重要な機会となる。
	妊産婦訪問指導	若年妊産婦やハイリスク妊産婦等保健指導の必要な妊産婦を保健師が訪問し、心身の健康管理についての指導・助言を行う。
	母子保健推進員活動	母子保健推進員は現在 4 名で活動している。活動の内容は、乳幼児健康診査事業・予防接種事業への協力、妊娠届出や母子保健に関する各種の手続きをしていない人への指導、母子活動に関する悩み・心配ごと相談（外国人の方の仲間づくりの機会）、貧血・離乳食実習などである。各種事業のチラシは郵送せずに、直接顔を合わせて配布している。母子保健推進員の導入は宮古管内で昭和 52 年から始まり、平成 7 年には宮古地区の母子保健推進交流会も発足し、精力的に活動している。保育所や支援センターに出向いての絵本の読み聞かせ、脚本からキャスティングまでを主体的にこなし子育て啓発のための演劇の実施、虫歯予防のためのフッ素塗布促進に向けた手作りポスターの作成などオリジナリティーあふれる活動を行っている。
子どもの心身の成長を支える健康づくり	乳幼児健康診査・歯科健康診査	4 歳児すべてを対象とする。
	新生児訪問指導	保健指導の必要な新生児（第 1 子は全て）とその保護者を保健師が訪問する。年間 12 件の訪問となっている。
	「赤ちゃんおめでとう」訪問活動	子どもが誕生した家庭を主任児童委員がお祝いの品（絵本）をもって訪問し、必要に応じて親子の相談を受ける活動で、主任児童委員を中心に訪問している。
	乳幼児健康相談	現在は保健師による相談であるが、今後小児科専門医による巡回診療についても検討されている。
保育サービス	保育所における交流・体験行事	親子遠足や運動会、小中学生との交流を通して、家庭と地域のつながりを深める。中学生の職場体験（保育実習）を行ったり、地域の文化・伝承活動を見たり、体験したりする機会を創出し、多良間村の文化継承活動を進めている。

いっしょに子育て・いっしょに親育ち	つどいの広場事業	地域の公民館等の公的施設を利用して、子育て中の親子が気軽につどい、打ち解けた雰囲気の中で語り合うことで、安心感をもたらし、子育てに関する悩みや問題解決のきっかけとなる機会を提供する。
	外国人生き生き子育て会	平成13年ころからベトナム、タイ、フィリピンからの女性が多良間村の男性と結婚し、島内に居住している外国人は増加傾向にあり、平成17年現在15人いる。言葉、文化、生活習慣等の違いを超えて地域での交流を深めながらつどい、家事・育児などが安心して行えるよう情報交換の場を作り子育て支援をしている。現在、日本語の習得やピクニックなどの交流会を毎月一回開催している。多良間村では「皆、顔の見える関係であるが、虐待のリスクのある子どもがいる」ため、臨床心理士による子育て相談など健診以外でも相談窓口を開いている。また外国人用の母子手帳（英語、タガログ語）も用意されている。
	生活福祉資金貸し付け制度	多良間島は高校がなく、高校、大学へと進学するためには本島や本土に転居せざるを得ず、通常の学費以外に下宿代がかかるため、低所得層に属する者に対して資金を貸し付けている。
	うちでのこづち事業	村立図書館などの施設において、地域の子どもたちへの読み聞かせやパネルシアター、民話や紙芝居、伝承遊び等を行い子どもたちの感受性を高める。
	三世代ゲートボール事業	「きずこう世代の和・地域の心」をスローガンとし、地域の老人クラブ、青年、子ども育成会がひとつになり、年に一回ゲートボール大会を実施している。毎年200名程度の参加者がいる。
	交流球技大会	日頃、親元を離れて生活している高校生と中学生、そして育成者がソフトバレーなどの球技を通じて交流を図っている。
サポーターの支援子育てを支える	地域の子育て支援活動	青年会、ＰＴＡ、婦人会、老人会など地域組織の活動を支援し、各団体の協力のもと地域全体で子育てしていく。

（次世代育成支援行動計画[15]より抜粋し、聞き取り内容から作成）

3）宮古地域（多良間村）の人がなぜ多産であるのか

保健師への面接から＜人と人との親密なつながり＞、＜何よりも子どもが大事という価値観＞、＜子育てしやすい環境＞という三つの要素が抽出された。以下に各要素について説明を加える。

（1） 人と人との親密なつながり

人間同士のつながりとして、“モアイ（模合）といわれる相互扶助[16]”が例としてあげられる。皆、“モアイ”にかこつけて人の家に集まったり、カラオケをしたりと交流を深めている。

子どもは学校から帰る途中に、皆で友達の家に集まり、少し過ごすと次の家に行き、また次の家ということになり、ようやく自宅に戻るころには暗くなっているという状況である。一度でも家に来た人に対しては、親戚のような感覚になる。

豊年祭（八月踊り）は、国の重要無形文化財であり、老若男女一丸となって執り行っている。

元々、子どもは皆で育てるという気風があり、母親も「赤ちゃんも転がしておいたら、誰かが育ててくれる。」「育児の中心は自分ではなく皆である。」と考えている。「預かってくれる？」「行っておいで。」　ということがお互いに気兼ねなしに言える「お互いさま」という関係性がある。皆で日雇いをして、高校生の帰省旅費などの足しにしている。

入学式などのお祝い事は地域ぐるみで行っていて、皆、いつが入学式かわかっているため、特に周知しなくても、親戚から友達まで何人もの人が家を訪れて祝ってくれる。顔を見て、皆で喜び合いたいという思いが当然のようにある。

仮に、子どもが外で遊んでいても、暗くなったら誰かが家まで連れてきてくれる。

道端で会っても、大人が子どもに「最近どうしてる？」というような声がけがあり、村が家族という意識がある。“モアイ”の集まりに出産後出席することは、「赤ちゃんのお披露目の場」になり、皆の子どもという感覚が芽生える。

（2）何よりも子どもが大事という価値観

教育資金についてはあまり意識しておらず、「子どもにお金がついてくる」という考えがある。子どもは「授かりもの」という考えが根付いており、子どもを持つことに自然体でいる。若いころから「おばあになったら、たくさんの孫にかこまれて暮らしたい。」という

人もいた。子どもや育児に対する価値観には「産んだらなんとかなるさ」というおおらかな気質がある。

お祝い事に関しては、親の友達が祝ってくれるということを、子どもが一番喜んでおり、親としては準備が大変であるが、子どもが喜ぶから皆を招待している。

（3）子育てしやすい環境

子育てしやすい環境のサブカテゴリーとして、＜豊かな自然環境＞、＜治安上安全な環境＞、＜生活費が安いという経済的環境＞、＜支援的な人的環境＞が抽出された。

＜豊かな自然環境＞では、大自然のもと、子どもが遊べる環境が整っており、のんびり、穏やかに子育てができる。

＜治安上安全な環境＞では、多良間島は離島であること、ほとんどの島民が顔見知りであることから不審者がいてもすぐにわかるため、家に鍵をかけることはほとんどない。子どもを安心して育てられる。

＜生活費が安いという経済的環境＞では、村では野菜などは近所から譲り受けるため、購入しなくても良い場合が多い。村営の団地の家賃も所得に応じて決められており、2～3ＬＤＫで1～3万円程度である。

＜支援的な人的環境＞では、多良間島においても核家族世帯が多くなっているが、親が徒歩圏内に住んでいるため、いつでも力になってもらえる。また、親以外にも自分の子どもを預けられる誰かが近くにいる。多良間島は一番遠いところでも徒歩10分程度であり、通勤にかける時間が少なく、残業もほとんどない。したがって、夫が早く家に帰宅するため家事・育児の協力がしやすい。例えば、多良間島では副業として農業を行っている世帯が多く、朝7時前に父親が自分の畑の巡回を兼ねて朝食前に子どもを連れてドライブに行く。朝の忙しい時期に母親は子どもに家事を中断されることなく専念できるという合理的な方法をとっている家庭もある。保育園にも父親が送っていき、母親がお迎えをするという役割分担がされている。

4．考察

保健師の面接調査から、多良間村の子育て支援対策のあり方と、多良間村では、“なぜ多くの子供を産み育てられるのか”について、少子化の背景・要因の対の関係にあるのでは

ないかという視点から考察を加える。

1）子育て支援事業の充実

多良間村では出生率が高いことから、少子化対策としてではなく子育て支援に力を入れていた。多良間村では助産施設がないため、妊産婦健診は宮古島からの巡回診療によって行われている。都市部の妊産婦は一日の大半の時間を妊婦健診に費やしていることを考慮すると、巡回診療が利用できる診療所が近所にあるということは妊産婦にとって身体的・精神的・経済的にも負担が少ないといえる。様々な事業において保健師や母子保健推進委員がパワフルに活動し、住民と同じ土俵にたっての育てあいがなされていた。また、妊産婦の日常生活の様子を把握した上での訪問指導がされており、このことは、母親へ安心感を与えるとともに、母子の異常の早期発見に大きな役割を果たしているといえる。各事業が顔の見える関係の中で成立しており、地域全体で子育てをしていくのだという姿勢が見受けられた。このように充実した子育て支援事業は、多くの子どもを安心して育てられる土台となっている。野多良間村の子育て支援事業は母子のニーズに沿った、ヘルスプロモーションが実現されている。

2）親密な人間関係に基づいた地域の子育て力の活性化

人と人とのつながりは、“モアイ”と言われる相互扶助を通して交流が行われており、この地域の人は皆で集まって何かするのが非常に好きだといえる。“モアイ”の場では、赤ちゃんも「みんなの子ども」と認知され、育児の不安や悩みを表出することで母親のストレスを軽減できる子育てのサポート体制ができあがる機会としての役割も果たしている。

また、人の家も自分の家のような感覚で行き来でき、道端で会った時に気軽に声をかけられることから、元来、島の人々の持つネットワークによって自然発生的に関係性が構築されているといえる。

多良間村は村全体がひとつの家族のようであり、子どもが生まれたら「みんなで育てる」という感覚が島の人に根付いている。「お互いさま」という意識が根底にあり、村では皆で日雇いをするなどの経済的相互扶助も行われている。喜びや苦労を一緒に分かち合うという姿勢は、日頃からの信頼関係があるからこそできることである。

以上のことから、多良間村において多くの子どもを生み育てられる要因には、少子化の要因のひとつであると指摘されている“人間間、世代間同士のつながりが断絶し、孤立化

している[17]”、“家庭や地域の子育て力が低下していることにより子育てに関する負担感が増大している[18]”という要因とは対極にある“親密な人間関係に基づいた地域の活気あふれる子育て力” があると考えられる。

3）何よりも子どもが大事という価値観の転換

子どもや育児に対する価値観には「産んだらなんとかなるさ」というおおらかな気質があげられる。子を産み育てるということは大きな悦びや命の尊さを感じ、人を愛するということである。この地域には出産は人間としてのより根源的な生き方だと自然に考えられる価値観がある。宮古島の多産の要因の調査[19]において、5人以上出産した女性5人のうち、中絶を考えた人は誰もいなかった。そして、「たくさんの孫にかこまれて暮らしたい。」という老後に対する価値観は、多くの孫に恵まれるためには、自分の子どもも多いということを意味している。また、自分自身も兄弟が数人おり、多くの人に囲まれて育ったという経験が、この価値観を育てる一因となっているとも考えられる。

男女共同参画社会に関する世論調査では、出生数減少の理由として、“子どもの教育にお金がかかるから”（58.2%）、“経済的に余裕がないから”（50.1%）があげられており[20]、主に経済的な負担が大きいことが考えられるが、島の人々は「子どもにお金がついてくる」という考えを持ち、子どもを持つことによる経済的負担は大きくても、精神的負担は少ないといえる。このことは「なんとかなるさ」という楽観的な気質も影響しているといえるが、子どもを産み、育てるというより根源的な人間的幸せに価値を置いているといえる。

少子化の原因の背景であげられた“結婚・出産に関する価値観の変化[21]”の中で、結婚して家庭を築くことや、子どもを持つことを積極的に選択していかないという考え方が増えていると指摘されている。また、この考え方の背景には“個人が自由や気楽さを望むあまり、家庭を築くことや生命を継承していくことの大切さへの意識が失われつつある”とも指摘している。多良間村にある、＜何よりも子どもが大事という価値観＞は上記に挙げられた背景とは対の関係にあるといえ、この価値観を広げていくことは子どもを産み育てやすくし、少子化の進行を食い止め、ひいては根源的な人間にとっての幸せに気づくきっかけとなると考える。

4）子育てしやすい環境づくり

多良間村では生活圏域が狭いという地理的な条件も重なり、育児支援や子育ての知恵が

比較的容易に得られ、安心して妊娠・出産・育児ができる環境が自然とできているといえる。多良間村の次世代育成支援行動計画におけるニーズ調査[22]でも、多良間村は子育てしやすい地域と多くの人が感じているという結果であった。子育てがしやすい理由として、「親が近くにいる」、「自然環境が恵まれている」、「知り合いが多い」となっており、同様の結果が得られた。

夫の家事・育児への協力としては、同じことを２人でする家事分担ではなく、役割分担がされている。少子化社会対策大綱[23]では、日本では父親が育児にかける時間が世界でも極めて少ないことが指摘されているが、多良間島の父親は帰宅時間が早いこともあり、家事・育児に多くの時間を費やしていることがうかがえた。

以上のことから、少子化の原因の背景である“子育てに対する負担感の増大”の中でいわれる“男性（父親）の家事・育児にかける時間が少ない、子どもを持つ夫婦が周囲から適切な支援をうけられない”ということは、多良間村の結果とは対の関係であるといえる。岡村らによる先行研究[24]においても、“男性の育児参加が求められている現在、宮古地域の父親の子育てを明らかにすることは意義のあることである”としている。今後、事例を増やした具体的な調査をすることで少子化の進行に歯止めをかける手がかりが掴める可能性が示唆された。

上記の考察をまとめてみると、多良間村では　（１）子育て支援が充実している、（２）親密な人間関係に基づいた地域の子育て力がある、（３）何よりも子どもが大事という価値観がある、（４）子育てしやすい環境が整っているということが明らかになった。これらの要因は、少子化の原因の背景となっている“結婚・出産に対する価値観の変化、子育てに関する負担感の増大”、“自己選択的な生き方による人間間同士のつながりの断絶化”に対して、対の関係になっているといえる。一方、“仕事と子育てを両立できる環境整備の遅れや高学歴化、経済的不安定”に関しては、今回の研究結果ではデータが不足しているため、検討できなかった。

５）看護への提言

以上のことを踏まえ、どのようなことが少子化対策として看護に適用できるのかを述べる。地域にはそれぞれに特性があるため、宮古地域のやり方をそのまま他の地域に適応するのは難しいかもしれないが、宮古での人間関係、出産や子育てに対する基本理念は対策を考える上での貴重な参考になると考える。

（1）子育て支援の充実

各事業において、行政と住民が同じ土俵に立ち、地域全体での子育てが実現できるような事業を展開していく必要がある。また、その地域の母子のニーズに沿った、今までの保健・医療・福祉が連携しにくい体制ではない子育て支援事業を推進していくことが重要である。さらに地域のネットワークを利用した事業の展開により、子育てへの負担感の軽減や地域の子育て力の活性化につながると考える。

（2）親密な人間関係に基づいた地域の子育て力の活性化

都市部でも小さな地区単位で顔の見えるコミュニティ(地縁関係)づくりを行うことで、地域の子育て力を活性化させることにつながるのではないか。多良間村のように元々、人と人との親密な関係性がある地域はその関係性を利用し、都市部に多く見られるような関係性の希薄な地域は、新たなる関係性を構築することが必要であり、その関係性の下に子育て力を活性化させることが望まれる。

（3）何よりも子どもが大事という価値観の転換

子育ての本来の楽しさや自らの命の大切さを実感できるような教育をする。また、村と都市部の交流を図ることは、素朴な精神に触れ、いままでの妊娠・出産・子育てに関する価値観を揺るがす可能性がある。“子どもを持つことは人間としてのより根源的な生き方だ”と自然に考えられる価値観を広めていくことが重要となる。

6）本研究の限界と今後の課題

本研究では対象者が少ない為、研究データが飽和に達していない。今後は研究結果の信頼性・妥当性を高めるために、面接の対象者を増やしていくことが必要となる。今回の研究結果を基に、対象者と対象地域を増やすことで、宮古地域の多産の要因を追及していきたい。今回の研究では検討できなかった、少子化の原因の背景である、“仕事と子育てを両立できる環境整備の遅れや高学歴化、経済的不安定”について分析することが必要である。また、出産・育児についての価値観は、もともとこの地域に生まれ育った人と、他県から嫁いだ人との違いを比較してみることも必要である。

5．おわりに

多良間村における多産の要因として、3 名の保健師への面接調査より、1）子育て支援が充実している、2）親密な人間関係に基づいた地域の子育て力がある、3）何よりも子どもが大事という価値観がある、4）子育てしやすい環境が整っているということが挙げられた。このことは、少子化の原因の背景と対の関係にあることが明らかになった。親密な人間関係を形成していくことや、子どもや育児に対する価値観は個人的な要因が大きいため、合計特殊出生率に即、影響を及ぼすような少子化対策は立てられにくい。しかし、様々な政策提言があっても、少子化に歯止めがかからないのが現状であるため、人間関係についての価値観や、子ども・子育てについての価値観を転換させていくような政策が望まれる。多良間村に見られたような、“人と人との親密なつながり”、“何よりも子どもが大事という価値観”などを若い世代に伝えていき、地域の子育て力を活性化し、子育て支援を充実させていくことが、少子化に歯止めをかける一因となると考える。

謝辞

面接調査において、快く承諾し、協力してくださった保健師の皆さんに感謝いたします。また、研究の場を提供してくださった保健所の皆さんに感謝いたします。

資料１

聞き取り調査質問紙

質問１．宮古地域、多良間島の地域特性について

質問２．少子化対策（出生率の向上につながる活動や子育て支援など）につながるような保健活動がありましたら教えてください。

１）行政の活動　　（保健所、村）

２）住民が主体的に行っている活動

質問３．多良間村の人がなぜ多産であるのか

（島の人間関係、出産・子育て環境や価値観、など）

＜引用文献＞
1 平成16年度人口動態統計月報年計の概況
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai04/index.html
2 経済企画庁、「平成4年度国民生活白書　少子化の到来、その影響と対応」、大蔵省印刷局、1992.
3 厚生白書、「少子化社会を考える－子どもを産み育てることに『夢』を持てる社会を」厚生労働省、1998
4 内閣総理大臣主催「少子化への対策を推進する国民会議」1998
5 少子化対策プラスワン、1997
6 内閣府、少子化社会白書、2004、p.15
7 横浜市企画局少子・高齢化社会対策室編、少子社会カルテ　その現状と課題、ブレーン出版、1997、pp.64-68
8 和田攻・南裕子・小峰光博編、看護大辞典、医学書院、2002. p.1777
9 宮古福祉保健所概要、沖縄県宮古福祉保健所、2003、p.1
10 多良間村勢要覧、2002、p.7
11 宮古福祉保健所概要、沖縄県宮古福祉保健所、2003、p.47
12 宮古福祉保健所概要、沖縄県宮古福祉保健所、2003、p.45
13 多良間村勢要覧、2002、p.16
14 多良間村勢要覧、2002
15 次世代育成支援行動計画　多良間村、2005
16 下川裕治・篠原章編著、 沖縄ナンクル読本、講談社文庫、2003、pp.35-37
17 横浜市企画局少子・高齢化社会対策室編、少子社会カルテ　その現状と課題、ブレーン出版、1997、pp.64-68
18 内閣府、少子化社会白書、2004、pp.43-46
19 尾崎米厚他、平成１６年度厚生労働科学研究費補助金　少子化社会における妊娠・出産にかかわる政策提言に関する研究「宮古島の多産の要因」2005
20 総理府広報室、男女共同参画社会に関する世論調査、1997
21 内閣府、少子化社会白書、2004、p.33
22 次世代育成支援行動計画、多良間村、2005、p.6
23 少子化社会対策大綱、内閣府、2004
24 岡村純・上田礼子・河田聡子、中年親の子育て評価と評価にかかわる要因－宮古地域と東京都の比較を中心に－、沖縄の小児保健、第29号、2002、pp.15-25

＜参考文献＞
25 神尾真知子、総合調査　少子化対策の展開と論点、社会労働調査室、2004
26 河田聡子、与那嶺尚子、上田礼子、文化と子育て：沖縄県本島南部一地区における県外出身者の場合、沖縄の小児保健、第31号、2004
27 毎日新聞社人口問題調査会編、少子高齢社会の未来学、論創社、2003
28 毎日新聞社人口問題調査会編、超少子化時代の家族意識　第1回人口・家族・世代世論調査報告書、毎日新聞社、2005

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）

思春期の子どもを持つ親を対象とする住民主体のワークショップ
私たちから子どもたちに伝えていくこと

待鳥美光(和光市地域子ども防犯ネット事務局)

１．はじめに

１６年度の研究において私たちは、抜本的な少子化対策として現代科学的な価値観の中で切り捨てられてきた相互関係性の継続を回復する対策が必須であることを提起した。

とりわけ高出生率の宮古島・多良間島モデルの分析・考察から、従来の行政による子育て支援策以上に、地域で世代から世代へと継承される子育て風土が、多産要因として大きな影響力を持つことが明らかになった。

子産み、子育ては、現代科学的な思考や経済効率優先の価値観の対極にある営みである。経済優先社会において少子化は必然の現象とも言えるが、その中で、世代を超えて継承していく人間的な価値観を失わないためには、今本質的な少子化対策を考えることに大きな意味がある。

すでに１６年度に提起した「人と人との関係性の再構築」と「価値観の変容」を根幹にすえた地域実践のひとつとして、思春期の子どもを持つ親を対象とする継続的なワークショップの試みを行った。

和光市は、宮古島・多良間島とは対照的に、地域に伝わる子育て風土は希薄であり、比較的住民の年齢層が若く転出入の激しいまちである。このような地域で、親から子どもに何を伝えていけるのかを考え、子どもを産み育てることの意味を世代から世代へと継承していくことを喚起するワークショップをめざした。

参加者が自分自身の中にある「次世代に継承していくもの」として、自分自身の生きざまやその中で培ってきた価値観、子どもを産み育ててきたことの原点にあるものを振り返る中で、さまざまな「気づき」があった。継続的に実施したワークショップのプログラムを参加者とともに創り上げていくプロセスにおいて、参加した住民は「参加者」であると同時に、このワークショップの「主催者」でもあった。

２．ワークショップの概要

①主催　：　和光市地域子ども防犯ネット

コーディネーター　：　国立保健医療科学院　福島富士子

共催　：

②日程・参加者数等

第１回　平成 16 年７月７日　「今子どもたちに伝える大事なことは何か」

参加者　約 60 名

第２回　平成 17 年７月 11 日　「私たちから子どもたちへ伝えていくこと」

～コミュニケーション・エチュード～

参加者　約 30 名

第３回　平成 17 年 12 月８日　「私たちから子どもたちへ伝えていくこと」

～親としての原点を振り返る～

参加者　約 30 名

講演会　平成 17 年 10 月３日　私たちから子どもたちへ伝えていくこと

「思春期の性を考える」

（社）地域医療振興協会

ヘルスプロモーション研究センター長　岩室　紳也氏

参加者　約 80 名

３．各ワークショップの実施方法と結果

①第１回

日ごろあまり交流のない他校区の保護者同士７～８人でグループをつくり、テーマごとに意見交換と発表をした。また、関連してコーディネーター福島富士子氏より思春期保健と生活習慣についてレクチャーを受けた。

テーマ１＝今、子どもたちに伝えていく大事なことは何か

テーマ２＝大事なことを伝えていくために何をすればよいのか

このワークショップが実施された時期は、佐世保の小学校内での衝撃的な事件をはじめ、さまざまな子どもたちの事件が続発し、保護者が子育てに自信を失いがちであり、子どもたちとの関係について危機感が高まっていた背景がある。

グループワークで全員が思いを表現する機会を得たことで、他の保護者と共感することにより迷いや孤立感を乗り越えたり、また「子どもたちの問題」が実は自分自身の問題であることに気づくことができた。身の回りのくらしかたを見直し、日常的な行動を少し変えていくことで活路が見えるという「気づき」があった。

②第２回

具体的に子どもとの関係や、保護者自身の周囲との関係性を見直す契機となるワークショップをめざした。ワークショップ実施前に、参加者に子どもとの関係について調査票による調査を行った。

机上の知識や現代科学的思考の「言葉」による伝達ではないコミュニケーションのありかたを感受することが、ひとつの眼目となった。そのため、演劇的手法を取り入れ、身体（視線、タッチ、互いの身体の動きや醸し出す雰囲気に感応する力）を使ったコミュニケーションへの導入を行った。また、ロールプレイングにより、「聴く」「聴かない」「傾聴される」「聴いてもらえない」立場を体験することにより、日ごろのコミュニケーションを振り返ってさまざまなことに気づいた。

参加者は比較的子どもへの関心やコミュニケーションの頻度が高い保護者層であったと考えられるが、子どもの側に立って自分自身のありようを振り返る体験から気づいたことは大きかったことがうかがわれる。

③第３回

今年度最終となるワークショップは、子どもたちに伝えていくべきものを自分自身の中で確認するために、「私」という一個の人間の原点をあらためて振り返る試みとなった。自分が人に「手を貸す」「支援する」とはどういうことかを考えるロールプレイング、自分自身がこの社会をどうとらえているのかを確認しなおすグループワークなどを通して、「まずは自分が変わること」「自分自身が行動すること」を、もう一度それぞれに問い直す契機となった。

４．考察

今回のワークショップ開催の背景に、地域の中で、あるいは学校との関わりにおいて、他者と関係性を結びにくくなった親の問題、また子ども達自体の変容に対する危機感があった。社会的にも子ども達の世界のさまざまな問題が表面化し、親の間に子育てに対する自信喪失や戸惑いも広がっていた。

そうした中で、親の世代から子ども達に、子を産み育てることを称揚するメッセージが伝わらなくなっているのではないか、親が子育てを楽しみ、子育てから得る幸福感や親の生き様を子どもたちに伝えていかなければ、少子化はさらに進行していくばかりではないかという思いから、まずは自分たちの足下の地域を変えて行こう、そのためにできることをしようと、ひとつの試みとしてのワークショップを開催した。

ワークショップの継続的なテーマ「私たちから子どもたちへ伝えていくこと」は、次のようなことを期して設定した。

１）子を産み育ててきた者として、自分自身を支えてきたものを確認し、自分の日常

の生き様をふりかえる。

2）自分自身の内なるものをもう一度感じ、認めて、自分が自分であることへの肯定と自信を持つ。

3）我が子に、あるいは次の世代に向けて、自分自身を語れる親・大人であることはどういうことか、それぞれの‘気づき’がある。

4）伝えたいものがあること、伝えることが大事だということに気づく。

5）具体的に伝えていくための手段やスキルを自分なりに獲得していく展望を持つ。

6）自己完結、あるいは我が家庭で完結するのではなく、他者との関係性、地域づくりへと発展する視点を獲得する。

7）小さな一歩が無意味ではないことに気づき、まずは自分が動くというモティベーションを持つ。

3回のワークショップで確認できる成果は限られているが、参加者感想から、それぞれの気づきの場となり、今後へのきっかけをつくったという意味で、めざしたものの一端は達成できたのではないかと考える。

このような活動は、即数値としての効果をはかることは難しいが、地道に積み重ねていく中で、少しずつではあるが、やがて確実に地域を変えていく活動と言えるのではないか。そういう意味では、「現代科学的絶対思考」を超えて、効率や計算の外にある、まさに人間的なつながりの中で確実に実を結んでいくメソッドなのではないかと、期待するものがある。

継続ワークショップ第1回(2004年7月7日)

今、子どもたちに伝えていく大事なことは何か。大事なことを伝えていくために何をすればよいのかのふたつをテーマにグループワークを行った。

【グループワークの手順】

テーマ1　今、子どもたちに伝えていく大事なことは何か
テーマ2　大事なことを伝えていくために何をすればよいのか

テーマ1の話し合い → グループごとの発表 → 福島先生のコメント

→ テーマ2の話し合い → グループごとの発表 → 福島先生のコメント＋講演

【参加者】

市内11小中学校の保護者を中心に、52名の参加者があり、6つのグループに分かれて、日頃あまり接点のない他校区の人たちと話し合う機会となった。第4グループのようにお父さんたちを中心に構成したグループもあった。

【各グループ話し合いの記録】

グループ1

テーマ1

- 子供たちが被害者にも加害者にもなってしまう。
- 最近の事件を受けて思ったこと
- 男の子二人。犯罪が他人事でなくなってきている。自分の子も加害者になる可能性
- 年齢も場所も関係なく起こってきている
- 怖いことは、仲のいい同士でも何も起こらないとはいえない→人が信じられなくなるのでは？
- 6年生、学年で1クラスしかない学校、相手のいやなところがあっても良い所を探して認めてあげるように子供たちに伝える
- 子供が自分のことをあまり話さない
- 事件を聞いて子供たちが頑張ろうとしている事に対して大人が道をふさいでしまう。チャレンジしようとしていることに対して大人が先回りをしてやってしまう。子供の力を信じることが大切

・ 幼稚園で働いていて、自分の着替えができる子とできない子→親の対応によって違ってくる。できないと決め付けて親が先回り
・ 親が子供を認めてあげる
・ 集団でないと何かできない。誰かとうまくいかなくなるとなにもできなくなる
・ 親しくなりすぎるとうまくいかなくなることもある。無理が出てくる
・ 子供が距離感をつかむのがむずかしい。やればやっただけ返ってくるはずと思ってしまう。相手の懐に入ってしまうとそれを嫌う人もいる
・ 見せるのは好きだけどあげるのは嫌い。トラブルのもと、女の子にはありがち
・ 本気でけんかして成長したこともある
・ 親が上の子をお兄ちゃん、お姉ちゃんという扱いをすると、大人になっても不満はたまったまま。一人一人を大切に。個々に
・ 兄弟でも男・女で4つ違いだとそれぞれ一人っ子を育てるよう、4年間親の愛情を独り占めだったのが下の子が生まれたら親の愛情がすべて下の子に向いてしまったように感じてしまう
・ 下は下で上の子に対してお兄ちゃんばっかりいい思いをしている。そのときに下の子にはお兄ちゃんには内緒ねとか逆に上の子に下の子には内緒ねというのをたくさん作った。今はお互いに思いやっている。自分がしてもらったことを下の子にもしてあげている
・ 中学生ぐらいになるとあまり話をしなくなるが親子の会話はある
・ 友達関係、兄弟関係
・ 信頼・愛情・親と子　○対○の関係（兄弟が何人いたとしても）誰もが自分のことを見ていてほしい
・ 友達とうまく関わっていきたいのに関わっていけない難しさ。十人十色

テーマ2　大事なことを伝えていくために親が何をしたらよいか

＜命の大切さ・命の尊厳＞

・ 出産経験を話してあげる。ただ大事といっても伝わらない
・ 命の神秘
・ だから人が人を傷つけてはならない。他人がどうこうしてはならない
・ ホームレスでもひとつの生き方
・ 自分の実体験の中で誰かを傷つけてしまったことなど、他人に対する気持ちなど後悔していること
・ 親の経験に基づく会話
・ 事故事件など
・ ペット・身の回りの話
・ 人が亡くなることを経験しない

・ 「生んでよかった」といっている。身近なこと日常の中で言葉にして伝える。自分は生まれてきてほしくて生まれてきたという事を感じている→人にやさしい
・ 自分の子どものときの話などをよくする
・ 挨拶が一番大事。まず、自分が挨拶は誰にでもする
・ 他人の子もおこる
・ 家庭の中でまず認め合う
・ 家の中でお母さんが何でもしてくれることが当たり前ではない。「ご飯を作ってくれてありがとう」何かしてもらったら感謝の気持ちを持つ
・ 家庭の中でお父さんが１番、お母さんが２番、お姉ちゃんが３番、下の子が４番、ぬいぐるみが５番
・ 「お姉ちゃんなんだから」という言葉は言わない、かえってそれを言わないことでがまんできる

＜生きる力＞

・ 親が今何かに向かって頑張っているんだよという所を伝える
・ 実際にやる
・ 結果が出るまでやらせてそれを親が評価してあげる
・ 誉める
・ 先に悪かった事を言ってあげて、でもよくできたと誉める
・ 小さいときから色んなことを経験させてつらいことがあっても親があなたを愛しているという安心感を与える
・ 満足感・達成感
・ 外で何があろうと、最後は親が支える。逃げ場・安心感
・ つらいことを親が排除してはいけない
・ 昔から、つらいことやいやなことはあったはずなのに、なぜ今こんな事件がおきているのか
・ 小さいうちから親が一番、親が大事というのと同じように親にとっても子供が大事

グループ２

テーマ１

・ 金魚を買ってきて死んでしまったことで泣く
・ 命という言葉を伝えていくのが難しくて私もどう伝えていいか分からない
・ キレてしまう子が増えて我慢できない子がいる
・ 自分がやられていやな事も同じ事をしてしまう
・ 小学生という事にびっくり、またあると、また小学生かと慣れてしまう自分
・ 自分ひとりで抱え込んでしまいコントロールしていけなくなっている
・ 周りの人たちがもう少し何とかできなかったのか、フォローして